

会告 「飛鳥池遺跡の保存・活用についての要望書」について

飛鳥池遺跡は、一九九一年の調査でその存在が確認され、「万葉ミュージアム」建設に伴う事前発掘調査で、律令国家成立時期の国家的施設であることが明らかになった遺跡である。この遺跡の性格が、七六〇〇点を超える出土木簡により解明されたことは周知に属するが、これらの史料は当該時期の歴史を考究する上でも大きな手掛かりになるものと思われる。

木簡学会は、発掘当初から遺跡を取りまく状況を注意深く見守ってきたが、多くの歴史学会や市民団体による度重なる保存要望のかいなく、多量の杭が遺跡に打ち込まれた。この事態を重くみて、飛鳥池遺跡の保存と活用を求める要望書を一九九九年二月の総会で採択し、奈良県知事・奈良県議会議長・奈良県教育長・明日香村村長・明日香村村議会議長に送付して、善処方を要請したところである。

木簡の研究・保存をめざす木簡学会は、もとより木簡出土の遺跡そのものの保存をめざすことをその責務と心得ている。飛鳥池遺跡の保存をめぐる経緯を謙虚に受け止めつつ、再び同様の遺跡破壊が起こらぬことを切に希望するものである。

飛鳥池遺跡の保存・活用についての要望書

奈良県明日香村では現在、奈良県により飛鳥池を埋め立てて、「(仮称)万葉ミュージアム」の建設工事が進められています。

周知のように、奈良国立文化財研究所による事前発掘調査は、そこでわが国の律令体制成立時期の、国家的な施設を発見するという大きな成果をあげました。すなわち飛鳥池遺跡は南北二つの地区に分かれますが、南半部では多数の建物や炉跡などが検出されるとともに、金・ガラス・瑪瑙などの貴金属・玉類、それに富本銭・飾金具をはじめとする鑄造関係遺物が大量に出土し、そこが七世紀後半から八世紀初頭頃の宮廷付属の総合的工房跡であることが判明しました。また北半部には建物や方形石組池などがあり、その北に接する飛鳥寺、それも特に道昭の東南禪院と密接な関係にあることがわかりました。

こうした遺跡の性格付けには、七六〇〇点余と大量に出土した木簡が重要な役割を果たしたところです。すなわち「天皇」の語の見える木簡、天武天皇十一年の新嘗祭に関係するかとみられる「次米」の荷札木簡、道昭の弟子「智調」の名が見える木簡、大和各地の寺名を列挙した木簡、それに銀の荷札など、多種多様な内容の木簡が含まれていましたが、特に宮廷や飛鳥寺・工房に関わるものが多いという特徴があり、文献史料の少ない当該時期の

歴史を解明する上で、大きな手がかりとなるものです。約一〇年前、平城京跡で大量に出土した長屋王家木簡・二条大路木簡が、奈良時代史像を実に豊かにしたことは記憶に新しいところですが、それより一時代前に位置する飛鳥池木簡も、それにまさるとも劣らない意義を持つものです。

上記のような調査成果を受け、多くの歴史学会や市民団体などが奈良県に対し、「(仮称)万葉ミュージアム」建設計画の見直しと遺跡の保存を求めたところです。しかし県は一部、計画変更をしながらも建設着工を強行し、既に多くの杭が遺跡に打ち込まれました。

木簡の研究・保存をめざす木簡学会は、これまで飛鳥池出土木簡の歴史的意義に注目してきましたが、木簡及び遺跡そのものの重要性に鑑み、木簡は遺跡と一体のものであるという認識から、今回の事態を黙視することはできません。ここに強く抗議するものです。

現在、同遺跡の史跡指定に向けた動きがあると聞きます。これ以上の禍根を残さないためには、指定範囲や「ミュージアム」の展示内容などに、今回の調査成果を十分に生かすことを強く求めます。また「ミュージアム」周辺でも、道路をはじめとして開発が進むことが予想されますが、当該地の南には酒船石があり周囲に石垣をめぐらした丘陵が接し、北には飛鳥寺、西には飛鳥京遺

跡が位置するなど、周辺にはわが国有数の古代遺跡が、相互に密接に関連しつつ、濃密に分布しています。これらの遺跡が今後、開発により破壊の危機にさらされるような事態にならないことを、関係機関に要求します。

遺跡を破壊してのミュージアムなどありえません。「(仮称)万葉ミュージアム」が、飛鳥池遺跡の史跡指定をきっかけに、文化財の破壊ではなく、保存・活用の良き事例となることを切に要望するものです。

一九九九年二月四日

木簡学会